

能楽研究と情報

—東海地域能楽データベースを中心に—

飯塚 恵理人

1 はじめに

平成3年4月に椋山女学園大学生生活社会科学科が創設され、早くも6年の歳月が流れた。一般教養「文学」担当の教員として創設の時に呼んで頂けたのだが、その時と比較しても情報機器の進歩をしみじみと感じる。当時はインターネットのアドレスを自分で所有していなかったし、学内LANもまだ引かれてはいなかった。今は学生が携帯電話を持って歩く時代だが、その当時はポケベルを持っている学生というのもほとんどいなかった。自分たちが一日に手にすることの出来る「情報」は、こうした機器の進歩による「情報源」の拡大で格段に多くなったと思う。携帯電話の普及で家にいない相手への連絡もスムーズに行くようになった。それと同時に、その「情報」といかにつきあうかということも、それぞれの個人にとって重要な課題になりつつあるのではと思う。

社会の「情報化」は進んだ。しかしながら、その事によって「日本」は豊かになったのだろうか。最近の不況を考えると、「情報」が多くなったからといっても、それが利潤に直結するとは思えないし、また余暇が増えたようにも思えない。仕事が早く出来て時間が浮くのなら、余暇はのんびりと過ごすことが出来る筈だった。しかしながら、世の中がせかせかせかしてきて、余った時間を使ってさらに別の仕事をするのが当たり前になった。結局自分の本当になすべき仕事にまで食い込んで来ているような気がするのである。妙な懐古趣味なのかも知れないが、私がここに奉職したころは、まだ時間が今よりゆったり流れていたように思うのである。

こういう時代であるだけに、「情報」を集める目的と「情報」を集める手段、そして「情報」を自分の仕事にどう活かすかということは非常に大切であるように思われる。日常が忙しくなっただけに、自分が何のために生きているのかも常に考える必要が出てきたように思うのだ。便利になったが故に余計な仕事に振り回されて、自分のやりたい事ができなかったならば、何のための便利さかわからない。現在の気ぜわしさは、ここ10年の間に起こった「情報革命」とでも言うべきものに、結局は人間が慣れていないということになるのだろう。

本稿では能楽研究という自分の専門の学問と、自分が情報機器を用いて何を行いたいかという点について述べさせて頂きたいと思う。まだまだ教員としても研究者としても駆け出しであるので、色々御教示頂ければ幸いである。

2 能楽史研究と謡曲研究の課題 —情報科学との関わりから—

私の専門は国文学で、特に能楽を対象としている。能楽の分野の研究史は浅く、吉田東伍による世阿弥伝書発見を近代能楽研究の出発と考えたとしてもせいぜい100年に満たない。したがって『源氏物語』など研究史の長い作品ではとくに完備している基本的な研究資料がまだ完備していない。たとえば『源氏物語』で言えば、異なる文章を持つ種々の本を照らし合わせて原型の本文の性格を明らかにする「校本」、そしてそれらの言葉を検索するための総索引、全文の語釈・訳を載せる全注釈が完備されている。しかしながら、謡曲の場合、校本で言えば戦前に作成された五流の現行曲を校合した不完全な校本が一つあるのみである。また現行曲全部の注釈・全訳は佐成謙太郎の『謡曲大観』（昭和6年 明治書院）があるが、これも戦前のもので戦後になされた発見は当然含まれていない。『謡曲二百五十番集』（赤尾照文堂）には索引があるが、これも完全な語句索引ではない。近年の研究成果を加えた注釈書としては伊藤正義著の『謡曲集』（日本古典文学集成 新潮社）があるが、これも光悦本の100番に含まれるものの注釈であって、全曲を通したものではない。

「井筒」「江口」など世阿弥作で現在も人気のある謡曲の個々の分析は、伊勢物語などの謡曲が素材にした先行作品の当時の理解が古注釈の翻刻などによって明らかになったため、非常に精密になった。ただ謡曲全体を通してでは、謡曲の文体の特徴など検討すべき課題があるにもかかわらず、校本と頼りになる索引がないために足踏み状態になっているように思う。番外曲については、まだ活字化する必要のある曲もあるのでひとまず措くが、謡曲の総索引はぜひ作りたいものだと思っている。底本は観世流の現行曲を用いたい。さまざまな語句の変遷を経て現在に到達した本文であり、世阿弥時代のものではないが、一つ「基準」とする本文となると、中間のどの時代の本文に依っても中途半端なのである。そしてこの総索引用のソフトについては三木邦弘先生の御協力がいただければ、三木先生に『伊勢物語山口記 総索引』（平成7年3月 私家版）を作成していただいたときのものを用いたい。もう一つ問題なのはデータの入力と校正である。膨大なデータであるので、入力の手間もかかる。今注目しているのはOCRの進歩である。スキャナも進歩して、現在印刷物からの読みとりであれば90パーセントまで大丈夫とされている。しかしながら、学術関係のものでは98パーセント以上の信頼性は欲しい。校正に時間がかかってしまっただけではスキャナによる入力の手間を省いても何にもならないのだ。総索引というのは、語の区切り方などに必ず編者の個性がでる。実は総索引というのは、自分で作ったものがどの研究者にとっても一番使い易いのだ。従来はカードを手でとるところから始めなければならなかったのが、非常に人手と手間がかかった。誰にでもできるものではなかったのである。現在でも手間がかかるのは同じだが、語の並び替えなどはパソコンがやってくれるので相当な分量まで一人で言うことができるようになった。また、使用目的によって検索の方法も変えたい。これができるのが、本ではなくパソコン上で行うメリットだろう。これができたならば、謡曲における言葉一つ一つの使い方やイメージなど、従来ではなかなか証明できなかったことも徐々にわかるようになるだろう。この成果も能楽データベースの一部

として蓄積したい。

言葉の区切り方・言葉のイメージなど、機械的にはできないことに自分の時間を集中して考えることができる。また従来のカードでは扱えなかった大量のデータを一人で扱うことができる。この2点が文学研究者にとって情報機器の進歩によってもたらされた大きな恩恵であり、自分もそれを積極的に活用させていただきたいと思っている。

3 「名古屋」という立地条件と「能楽研究」 —東海能楽データベース—

私は小学校から高校までを知立で過ごした。実家は今は安城にある。高校時代にはよく熱田神宮の能楽殿で能・狂言を見ていた。結局高校の頃に大槻秀夫や上田照也や先代藤田六郎兵衛の芸に触れたことが、能を勉強したいと思った原点だろうと思う。大学・大学院は関東地方の大学だった。大学院時代は日本中世文学専攻で、能の台本（謡本）の文献学的な研究を行っていた。資料はほとんど法政大学能楽研究所のものを使用させて頂いたので、週に一回はそこへ出かけていた。ところが名古屋に帰ってくると簡単に資料を見に出かけることが出来ない。これには非常に困った。つまり大学院時代の研究を継続して行うためには、名古屋という場所は立地条件が非常に悪かったのである。ただ、奉職して3年目あたりになって、名古屋の能楽師の方々と面識を得ることが出来た。特に寛鉦一師（大倉流大鼓方）と佐藤友彦師（和泉流狂言方）の知遇を得たことは非常に大きかった。両師より、名古屋にはこれまで学界に知られていない相当量の能楽の資料があることを教えて頂いたのである。名古屋には尾張藩以来の能楽の伝統がある。尾張藩御役者の家で現在まで続いている家もある。尾張藩に関係する資料は、かなり質の高いものであった。これらの資料を活用する研究には、名古屋は非常に立地条件が良かった。そこで研究の中心を東海地域の能楽史におくようになった。

寛鉦一師の収集された資料の多くを占めるものに、明治期以降の東海地域の能楽番組がある。5千枚にのぼる能番組のコレクションは他に例がないと思う。能楽番組は上演された日時・曲目・演者などを記した能楽研究の根本資料である。これを整理出来れば当時の人々の曲の好み、演者の年毎の成長などがはっきりとわかる。しかしながら、これらはカードにまとめて整理するには資料の量が膨大であった。3年前もパソコンソフトにカード型データベース機能のあるものはあった。しかしながら、能楽番組のように複雑な要素をきれいに整理することはそれらのソフトでは到底不可能であり、私は人の手を借りてカードによる整理を行う方がむしろ現実的だろうと考えていた。（今の市販ソフトでもそれだけの機能はない。）寛先生よりこれらの情報を整理したいという御相談があって、私は深谷哲先生に御相談した。深谷先生より、番組に「曲名」「シテ」「ワキ」などの「記号（タグ）」をつけて入力し、パソコンよりもはるかに大量のデータを扱えるワークステーションで処理すれば、能楽番組のデータベースが作成可能であるというアドバイスと、詳細については三木邦弘先生に相談するようという御指示を頂いた。三木先生はプログラム作成を快く引き受けて下さったが、大変なご苦勞をおかけした。なにせ番組は縦書き、しかも本にした場合も縦組が基本である。コンピュータ関連のソフトは横組を前提として作られてい

るから、それを縦に直すのは、単純にみえて単純な作業ではない。入力には業者に委託した。平成6年度・7年度の椋山女学園大学研究助成を頂けたのは非常にありがたかった。そのほとんどを入力費に使った。しかしながら、実際にはそれでも足らなかった。寛鈺一師・永田一郎氏（大倉流大鼓方 故永田虎之助師令息）が番組の一部を自費で入力し、私どもに提供して下さった。そのようなご協力があって、寛鈺一師の手元に収集された能楽番組のかなりの部分をデータに入力することができた。寛鈺一師は番組の収集を継続しておられる。それらの資料をも入力させて頂きたいと思っている。また、すでに入力した資料については、校正を行っているところである。この入力した番組のデータベースを用いた中間報告として『東海能楽年鑑 平成5年版』（平成6年10月発行 東海能楽研究会）『東海地域能楽番組一覧（明治元年―昭和二六年）』（平成9年7月発行 東海能楽研究会）が刊行されている。またこのソフトに関しては、三木先生が「冊子作成システムについて」（『近代東海地域能楽史の研究―能楽資料の調査・収集とデータベース化』所収 平成7・8年度文部省科学研究費助成〔基盤研究（C）〕研究成果報告書 課題番号：07610438 研究代表者：飯塚恵理人）に執筆されているので参照されたい。

4 「情報」と「情報公開」の適否

『東海能楽年鑑 平成5年版』はデータベースの試運転として平成6年10月に作成したものである。そのなかに平成5年に行われた能楽番組のデータベースを用いて人物索引を作成した頁があった。これは一部の能楽師・愛好者の間からプライバシーの観点から好ましくないとしてかなりの反対を受けた。自分がその時期に何をしていたのか記録として残したくないという人も多かったのである。能楽番組が1枚ずつであるうちはめだたない情報が、索引化されることによってはっきりとわかる。それがデータベースの利点であるが、能楽史の研究という本来の目的以外にも悪用しようとするれば出来てしまうという危惧を抱く人もいたのである。「秘すれば花」という言葉は能の世界では現在でも生きている言葉である。能楽は舞台芸術であるとともに、能楽師諸師の「生業」である。いくら「学問的」であったとしても、それが生業を妨げるようなものであったとしたら能楽師諸師の理解を得ることは出来ない。この点がデータベース運用の際にも注意しなければならない事となった。『東海地域能楽番組一覧』は戦後昭和26年までの番組を対象として編集した。戦前を知る能楽師・愛好家が皆高齢化しているが、これらの方々に聞き取り調査を行わないと、戦前の東海地域の能楽界の様子がわからなくなってしまう。聞き取り調査の材料とするためにも、ある程度の知識は必要である。このための材料として作成したのだが、幸いこちらの反響はよかったようである。

「情報」ということを考える上で、一つ考えなければならないことは「今すぐに公開できない情報」も学問のためには集めておく必要があるということである。能楽番組は催しがすめば捨てられる運命にある。それらを収集するのは、その催しが行われる時しかあり得ない。現在使えなくても、資料としては集めておく態度が、このような現在続いている芸能の研究には必要である。しかしながら、「業績」にすぐ出来ない分野であるだけに、研

究費を得ることは困難である。それが現在の悩みである。

昭和に入って70年以上が経過し、明治維新がすでに130年前であるということを考えると、明治・大正・戦前といった時代も「近い時代」とは言い難くなってきたように思う。社会の変化につれて能楽界も大きな変化をとげた。従来の「能楽史研究」の価値判断から言えば、室町時代といった古い時代の研究の方が「成果」として認められやすいようにも思う。しかしながら、近代・現代の能楽資料を収集し、整理し、保存して、後世に「現在」の能楽界の姿を伝える事も、後世にとって意味のある仕事であり、幸いにして研究機関に奉職できたものの務めであると思う。近代の能楽資料はまだ大半が未整理である。それらを収集・整理することが、研究の出発点であるが、これらの資料は集まると膨大なものとなる。これら进行处理する上で情報機器は不可欠である。というよりも、情報機器の発達と、その恩恵を受けられる幸運な立場にいたからこそ、このような研究を行うことも出来たと思う。今後は、データベースの整備を行うとともに、それらによって知り得た事をさしつかえない範囲で論文にまとめて行きたいと考えている。

昭 和 二 十 一 年 九 月 二 十 九 日 午 前 十 時 始
市 一 高 女 講 堂 (車 道 町)

主 催 名 古 屋 楽 師 協 会

昭 21・9・29a 1 雛子 高砂 シテ 山田仁三郎 笛 金森準三 小鼓 青
木恒治 大鼓 西尾孫太郎 太鼓 山田一郎

昭 21・9・29a 2 狂言 膏薬煉 シテ 井上松次郎 アド 河村丘造

昭 21・9・29a 3 仕舞 玉之段 シテ 柴田初太郎

昭 21・9・29a 4 仕舞 天鼓 シテ 永島誠二

昭 21・9・29a 5 能 鉢木 シテ 観世喜之 シテツレ 長沼道夫 ワキ
西村弘敬 笛 藤田六郎兵衛 小鼓 福井五郎 大鼓 稻
波春風 間1 歌村彦四郎 間2 桜山壮次

(典 拠 お 能 の 番 組)

図1 「番組一覧」の例 (三木邦弘先生作成のプログラムによる)

名古屋 尾崎松風社 新年会(1・11) 名古屋能楽会 第5期第 1回(2・15b) 名古屋能楽会(6・7a) 名古屋能楽会(9・13) 宝正流 第4回 稽古能(10・18) 名古屋能楽会(11・5)	豊橋・新城 観世流謡曲大 会(6・7b)	岐阜 大垣金鈴会 発会(2・8) 宮井安吉氏歓迎謡 曲会(7・18) 霞会 離子会 (7・20) 真観社 第42回 月 並謡組(10・20) 片桐景好氏母堂追 善謡組(11・22)	三重 山田御巫邸 初会(1・6) 伊勢三雲会 初会(1・7) 三重県喜多流臨時 大会(2・15a) 津神社奉納催 (2・22) 於 伊 勢 二 見津松島館離子会 (3・1) 伊勢松阪三雲 会(3・14)
--	----------------------------	--	--

図2 「地域別番組一覧」の例
(三木邦弘先生作成のプログラムによる)

大正3年

井上菊次郎(303) 翁(7) 三番叟(5) 翁明19・1・17
1 明19・9・25・1 明36・1・18・1 大12・4・3・1 昭5・10・10
・1 三番三(2) 翁明5・8・21・1 明27・6・11・1 能(34)

図3 「人名索引」の例
(三木邦弘先生作成のプログラムによる)

画面の凡例が「その他」であるのを仕方がないと考えるにしても、プログラム・システムなど、大変な苦勞をして作って頂いている作品が「著書」よりも低い扱いを受け、それらの作って頂いた資料を使っている私のような立場のものはそれを用いて別に「著書」を書くことも出来るというのは何か釈然としない。科学研究費の募集には「コンピュータの人文科学支援」という項目がある。国文学の分野の研究者でも、今後自分たちの要望に応えるソフトの開発がなされるのではと期待している人は少なからずいる。だが私は、現在の業績評価制度の元では人文科学分野での情報科学の活用は、かなり遅れるのではないかと危惧している。こと「業績書」を出す事を考えると、大学教員である以上だれしも「著書」「論文」になる研究を優先せざるを得ない。そうすると、人文科学分野の研究を支援することが必ずしも工学系の先生の「著書」「論文」に直結しないので、その先生に断られるケースが多いのだ。私のように協力者を得ることができたのは稀な例外で、ソフトの開発を依頼して「技術的には可能だが業績書に書けない」と断われた話はいくらでも聞いている。人文科学と情報科学の研究者が共同研究を行う上では、少なくとも工学系の研究者については「特許」やプログラム・システムなどの「作品」が「著書」「論文」と同じ重さで「業績」として評価される必要がある。そうでなければ、忙しい工学系の先生方にソフトの製作をお願いするのが非常に心苦しいのである。共同研究が長続きするためには、その研究を行うことが共同研究者全員にとってメリットになる必要がある。現在の制度では圧倒的に人文系の人にメリットがある。このようなことが、人文科学を支援して頂ける工学系研究者がまだ少数である要因になっているように思う。工学系の人が人文科学支援に興味を持てるように、それらの仕事を正当に評価する制度が、早く確立して欲しいものだと思う。

6 今後の展望 —マルチメディア時代の能楽教材—

情報機器の急速な進歩は能楽番組のデータベース化のように大量の文書の処理を可能にしたが、また画像処理・音声データの処理などをも可能にした。能楽は本文の部分（言葉）、笛・小鼓・大鼓・太鼓という四拍子による囃子（音楽部分）、舞・ハタラキなどの所作（演技）の部分が重なって初めて成り立つ演劇である。そして能は仮面である能面を用いる。それぞれの分野には、それぞれの「約束事」がある。つまり能楽は「言葉」によって相手に理解させるのみでなく、視覚・聴覚に訴えて物語の内容を理解させる芸術であると言える。謡曲本文の解釈の説明を主とせざるを得ない従来の能楽教育では能楽が視覚・聴覚に訴える劇であるということを充分伝える手段がなかった。学生が「能を難しいもの」と捉える原因となっている。

例えば「能面」は、どのような面も、すべて人間の顔をデフォルメしたものである。能面において、女性の年齢は、髪の毛の毛書きと、ほおの肉の厚さで表現される。毛書きがまっすぐであれば若い女性であるということになる。毛書きに段が出来ると、やや年をとったという意味となり、その段の数が増えると中年であるということになる。これが夫が他の女性のもとに行き、嫉妬しているという面であれば、毛書きにほつれ毛が描かれるこ

とになる。ほつれ毛があるということが、嫉妬をしている女性を示しているという約束ごとになっているのだ。実際の能面にほつれ毛を描いたり消したりすることは不可能であるが、パソコン上であればアニメのように自由に表情を変えることができる。実際の能面にはない中間表情の面の絵なども作って「嫉妬をしていない表情（小面）」から「嫉妬の感情をおさえている表情（泥眼）」を経て「嫉妬の感情が怒りに変わった表情（橋姫）」となり、さらに「不実な男への怒りのあまり鬼になりそうな表情（生成）」、「不実な男への怒りから、もはや人間ではなく鬼となってしまった表情（般若）」までを表現することが可能なのだ。このようなマルチメディアの活用は、講義の方法にも変革をもたらす。写真をならべるだけでは教えることが困難だった能面の「約束事」を動きを伴うことによって教えることができるからである。同じ事は「囃子」についても言える。笛・小鼓・大鼓が合奏している部分では、大鼓と小鼓の音の違いを聞き分けよといってもなかなかできない。パソコンを用いれば、笛・小鼓・大鼓・太鼓の合奏から、大鼓と小鼓の音を取り出して別々に聞かせることもできるのである。この能のマルチメディア教材については「デジタル能楽館」という題で、今年度山根一郎先生にお願いして先生の卒研生達に取り組んで頂いた。指導に当たられた山根先生は大変だったろうと思うが、若い感性でなかなか面白いものが出来ている。このようなマルチメディアの進歩は、能楽の理解を助ける教材を作る上でも非常に期待できるように思う。

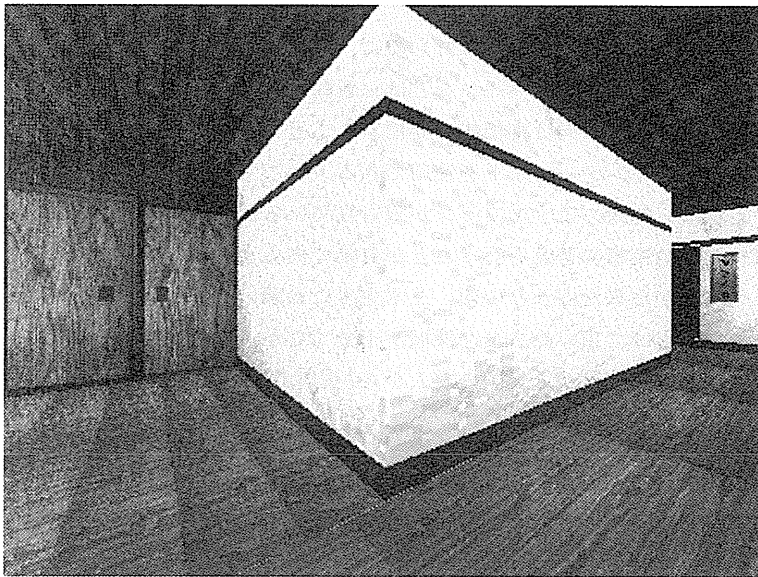


図5 「デジタル能楽館」の三次元映像（廊下）（山根一郎先生のゼミによる）

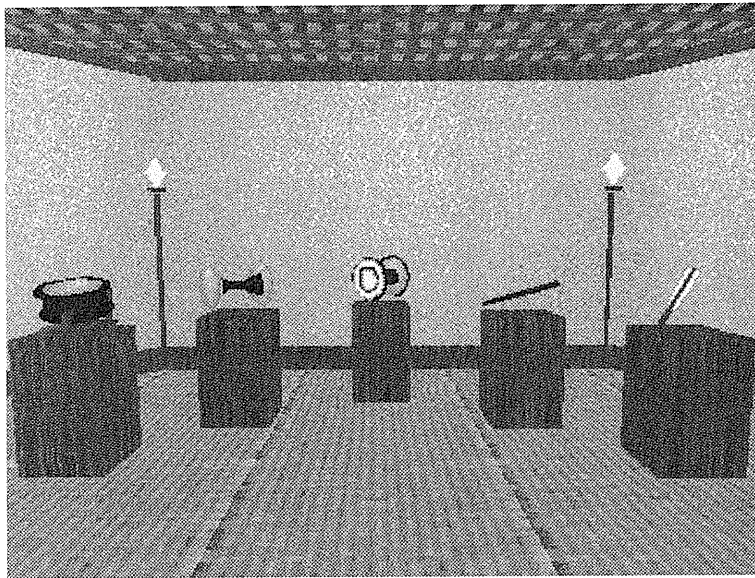


図6 「デジタル能楽館」の三次元映像（囃子の展示、楽器をクリックすると音が出る。）
（山根一郎先生のゼミによる）

7 「情報発信」と能楽教育と —海外との交流を含めて—

情報機器の急速な進歩で可能になったものに、個人による情報発信ということがある。例えばインターネットのホームページなどは、新聞・雑誌・テレビなどのマス・メディアに頼らずに、個人が世界に向けて情報を発信することの出来る手段であろう。能楽人口全体から見れば、まだインターネットを使用できる人はごく少数だろう。だがこれが普及する将来を考えれば、能楽のようにファンが限られている芸能では、このようなメディアで催しの情報や能の約束事の普及を行うことが有効であるように思う。2年ほど前、まだ梶山のホームページが出来たばかりの頃、三木先生にお願いしてやはり卒研で能楽のホームページ作成を取り上げて頂いた。まだ機械が十分でなかったころで、静止画を入力するのなかなか大変だった頃だが、韓国の友人から、「梶山のホームページでみたよ。」と言われたときは非常に嬉しかった。

日本人は、フランス人は毎日フランス料理を食べ、韓国人は毎日韓国料理を食べていると言っても余り心理的抵抗は覚えないと思う。しかしながら、日本人は毎日味噌汁と漬け物を食べ、名古屋人は朝はきしめん、昼は味噌カツ、夜はひつまぶしを食べて生活していると言われたならば、そんなことはないかと反論するだろう。海外へ行けば日本人も、「その国でしか学べないもの」を身につけたいと思うだろうし、「その国でしか食べられないもの」を食べたいと思うだろう。同様に、海外の人が日本に来ると、必ず「日本でしか食べられないもの」を食べたいと思い、「日本らしい所」に遊びに行きたいと思うようである。私は大学院時代のわずかな友人が韓国にいるので、暇があると韓国に行く。韓国で日本の

旅行ガイドをみつけたが、挙げられている名古屋の「行ってみたい店」のほとんどが味噌カツと名古屋コーチンときしめんと味噌煮込みの店であるのを見たときには、自分の感覚とあまりに異なるので驚いた。が、これは韓国の人が名古屋で自国の観光ガイドを見たときと同じ驚きだろう。東京の人ですら、名古屋を案内する時に「今日は名古屋らしいものを食べたいなあ」ということが結構あるのだ。

能を研究しているというのも、海外からの人を案内する時にちょっと得な時もある。非常に関心を持って頂けることもあるのだ。大学院生の頃、「能を見たいのだが。」と言ってくれたのは皆留学生ばかりだった。その仲間には、能の研究をして韓国で大学の先生をしている友人が2人いる。海外で能に興味を持つ人がいて、そこに映像まで簡単に送る手段を持つという意味で、ホームページ作成には非常に興味がある。能に限らず、日本でしか学べないもの、あるいは日本の情報として海外の人の知りたいたいだろうことはかなり多い。それをホームページにして発表することは意味があると思う。また、別に日本固有のものに関してでなくとも、学生の若い感性で作ったホームページなどは、それが出されるだけで、日本人の気質が徐々に変わってきていることを外国に伝えることにもなるかも知れない。(私は韓国で日本に留学経験のある年輩の方に「日本人は粗食に耐えてよく勉強するので偉い。」と言われて驚いたことがある。) それも今の学生の世代での国際理解に少なからず貢献するだろう。

8 おわりに

情報機器は従来「役に立つ」「お金になる」ということが非常に強調されて普及してきたように思う。その面を否定する気持ちはないが、「役に立たない」「お金にならない」が「楽しみにはなる。」ことをするにもかなり有効である。岩田彰氏は「マルチメディア通信時代における教育」(『情報処理教育研究集会 講演論文集』所収 平成8年12月)において、「これからの情報処理教育で教えるものは、プログラミング能力もさることながら、コンテンツを作成する才能を育てることも重要である。コンテンツはあらゆる業種で必要となる。」と言われる。「コンテンツ」とはマルチメディアを用いて伝える内容(=言いたい事)であろう。そして「コンテンツ開発で必要となる人材は、プログラマーとネットワーク技術者だけでなく、コンテンツ企画制作を指導するプロデューサーである。プロデューサーは、コンピュータ、ネットワークだけでなく、コンテンツの占める分野(医療、教育、ビジネス、エンジニアリング、放送、出版、広告など)に精通していなくてはならない。」と言われる。

自分が所属していると思うのは、生活科学部には実にさまざまな分野の先生がいるということである。椋山女学園全体となれば、相当多くの「コンテンツ」作成能力を持ち、またそれを教育することのできる人材がいる。そういう意味で言えば、ここの学園は、学生がそれぞれの分野の先生から知識を吸収し、情報のコンテンツを作るには恵まれた環境であろうと思う。ソフトにせよホームページにせよ、既存のものをただ使用するよりは、自分独自のものを作るという方がきっと楽しいだろう。何についてもそうだが、「下手でもなに

か作る。」と言うことは楽しいことであるし大切なことであると思う。高校教師をしていた頃、親が作った服を着ている子や、親が作った弁当を食べている子は、まず不良化することがないことに気づいた。服を作る親は子供の身長・体重を、弁当を作る親は子供の食事の量と好みを、実によく把握しているのである。「誰に見て貰いたいか」「何を伝えたいか」を考えながら、なにかを「作る」経験を学生にさせたいと思うし、自分も学生と一緒に取り組んでみたい。無論私の場合その「コンテンツ」は能楽が中心になるだろうが。

「人の役に立つ。」「お金になる。」というのと同じくらい、「自分に与えられた人生を楽しむ。」ことは重要だと思う。そして一生続けることの出来る趣味を持つことはその人生を楽しみ、豊かにすることに非常に益になるように思う。私は古典文学を教えているが、受講してくれた学生諸氏には、今すぐにそれを面白いと思うことが無理であっても、年齢を重ねた後に楽しみをみつけるきっかけにして欲しいと願っている。

女の子が生まれた友人に「どんな子に育てたい?」と聞くと、決まって「やさしくて思いやりがある子。」と答える。でもなぜか、親も子供が成人するに従ってそれを子供に求めなくなる。今後女性の職場進出はますます進むだろうが、私は自分の学生にはやはりどんな状況でも「やさしくて思いやりがある」女性であって欲しい。そして欲を言えば品のある女性であって欲しい。がさつで思いやりのない女性は、どんなに優秀な人でも男を雇えば用が足りてしまう仕事しか出来ないだろう。男にだって優秀な人材はいくらでもいるのだ。ただ、女の子を雇って良かったと周囲に思われる人は、必ず生活の中に楽しみがあるように思う。いつも心に不満を持っている人が、人にやさしく接することが出来る筈はないように思うのだ。学生には常々、「可愛いお姉さん」といわれるよりも、「楽しいおばあさん」と言われる方がずっと価値があるんだよと言っている。「楽しいおばあさん」は一日で出来るものではなく、若い頃からの趣味の蓄積がものをいうように思うからだ。

椋山女学園の目標は「人間になろう」ということだが、自分はこれを「人間には楽しみも必要だ」と勝手に解釈している。そして学生達には、人生を楽しむ手段を、この四年間の大学生時代に見つけて欲しいなあと祈っている。(自分自身は、周囲から心も身体もタヌキになって来たねえと言われるのだが。)